人口の社會形態學的作用と都鄙教團

福井元澄

目次

(一)序……二三九
(二)人口の移動と教團……二四二
Ⅰ 都鄙人口の移動……二四二
Ⅱ 都鄙教團の變動……二四五
(三)人口の社會形態學的作用と教團……二五六
Ⅰ 教團成員の社會關係……二五八
Ⅱ 信仰……二六六
Ⅲ 教團の中心……二七三
(四)結……二八〇

（一）序

一般に早期の社會に於いては、諸多の自然的人爲的障害によつて嚴重に束縛され封鎖せらるゝが故に、人の水平的地域的移動は極めて困難であり、從つて又社會的未分化の狀態にあつたと云ふことは、一般に認めらるゝところであらう。かゝる社會に於いては基礎社會のみが存在し、しかもその內部に於いて結社或は結合團體が分化せざるが故に、そこには團體の相違によつて生ずる社會意識の分化もなく、すべては唯一つの社會意識卽ち原規（Urnormen）とも云はるべきものゝみによつて規制され、宗敎、慣習、道德、法律等は未だ分化の狀態に達せず、相融合し、宗敎は主宰となりつゝも、それ等と相寄つて、社會意識の渾然たる一全體をなしてゐたことは明らかである。[1] 從つてかゝる社會の段階に於いては、基礎社會と宗敎團體卽ち敎團とは又未分一體であつて、氏族乃至部族則ち敎團であるとみることが出來るであらう。普通かゝる敎團は從屬的敎團と呼ばれてゐる。然るに社會の發展につれて、交通の發達、人口の增加は、原始社會に於ける封鎖性を漸次崩壞せしめ、社會的空間は次第に擴大されてゆく。かくして基礎社會の擴大は、自ら社會成員の生活對象、從つて又その行爲樣式を複雜多樣ならしむるのみならず、更に相互の接近接觸は、各々特有なりし行爲樣式を相互に流入せしめて、個人の素質の差異を增大し、個別化を生ぜしめて來る。而して社會成員の思惟、感情乃至行爲の一樣性或は類似性が失はるゝ結果、

必然同一社會内に於いて、特定の目的を特定の形式に於いて追求するものゝみをして、特定の結社或は結合團體を構成せしめる。[2] かくしてこゝに特殊的教團或は創唱的教團發生の素地が與へられるのであつて、即ち社會團體の分化に伴ひ、それに即して社會意識も亦分化し、宗教は原規より分化し出ずると共に、それ自らの内部に於いても別種のものを生じて來るのである。然るに特殊的教團も亦、擴大するにつれて、特定の目的と特定の形式によつて結合するところの小團體を分化せしめる。即ち社會的空間の擴大と社會内部の複雜多樣化に伴つて、社會成員の個別化は愈々增大するが故に、これ等個別化せるものゝ宗教的要求は、到底これを單一なる信仰と行事とによつて包括し統一することは不可能となり、その特殊的要求と目的とに應じて、こゝに教會や宗派が成立するのである。而してそれ等は更にその宗教的行法、理想、その他の信念の異なるに從つて分派するのであつて、所謂宗教的組合即ち講社の類は、多くは、その最も特殊的な小範圍のものと云ふことが出來るであらう。

而してかくの如く、社會團體の封鎖性の崩壞乃至人口の增加によつて分化し來たれる教團は、又更にそのことによつて、同時にその一般的構造に、必然規定を受けることは云ふまでもない。たとへば、僧伽、眞宗の所謂原始教團或は現存の宗派等は、等しく同一根本精神に立つものとは云へ、その形態或は性格に於いて著しき差異を有するのであつて、その社會學的な究明は一つの大なる課題であらう。然しながら今暫くそれは措き、こゝには、佛教に於ける特殊的教團の一つとしての宗派の、下部構造をなせるところの檀信徒集團に、考察の對象を限定したい。かゝる檀信徒集團は、宗派の構成要素となりつゝ、共通の信仰の下に、寺院或は僧侶を中心とし、夫々

獨立の集團をなしてゐる限り、これ亦一つの教團とみることが出來るであらう。③この小論に於いては、かゝる教團の成員たる檀信徒が如何に水平的地域的に移動し、④又そのことによつて、現代教團の一般的構造が如何に規定され如何に變容されてゐるか、農村に於ける教團と都市に於けるそれとを比較對照することによつて、その主要形相を一應明らかにしてみたいと思ふ。

① 臼井二尚氏「社會發展の論理」、理想(第五六號)四八頁。

② 同

③ 吾國に於ける佛教々團の基礎的なるものは、宗派、分派及び檀信徒集團であらう。家族も亦その一つとしてみられるであらうが、然し現代特に都市に於いては、それを教團と認むることは困難である。

④ 人口の移動 (die Mobilität der Bevölkerung) と社會的移動 (die sozial Mobilität) とは嚴密には區別せられねばならない。ソロキンによれば、社會的空間に於ける人口及び文化財の社會的移動は、水平的移動 (horizonal mobility) と垂直的移動 (vertica lmobility) に分たれる。而して水平的移動は、人口及び文化財の地域的移動即ち移住及び住居の變更や同一職業間に於ける水平的移動等の諸形式を意味し、垂直的移動とは、身分的階級的移動即ち社會的上昇や社會的下降等に於ける諸形式を意味してゐる (P. Sorokin; Social mobility. pp. 133-134) が、こゝに云ふ人口の移動は、人口の水平的地域的移動を意味する。その垂直的移動及び同一職業間に於ける水平的移動に關しては、重要なる關聯あるも今こゝには觸れない。

（二）人口の移動と教團

I　都鄙人口の移動

現代都市の著しい特徴の一つは、人口の垂直的移動と共に、又その水平的移動がはげしく且つ大であると云ふことに存するであらう。而して都市人口の水平的地域的移動が大であると云ふことは、先づ第一、都市人口は、農村人口に比して、同一居住地域に止る割合は少く、居住地域を變更し移動する割合が大であると云ふことによつて示される。たとへば、一九二〇年アメリカ合衆國に於いてその居住地區に於いて出生せる人口の比率は、農村に於いて八一、八％であり、これに反して都市に於いては僅かに六、六％に過ぎなかつた。① 更に又、東京市に於ける在京年數統計（昭和十年調査）によれば、その來住人口の內、一ヶ年から五ヶ年の間在市する人口は、全來住人口の四三、四四％の高率を占め、特に一ヶ年間の在市人口は一六、四六％の多きを示し、更にその在市年數が大なる程、漸次その人口數は減少してゐる。このことは、都市に於いては農村に於けるよりも、原住人口に對する移住人口の割合が一般に比較的に大であり、しかも都市人口の多くは、短期間のみしか一定の居住地に止らないことを示すものであつて、都市人口の地域的移動性が、著しく大なることを證明するものに外ならない。然

引きつゞき常住せし場所	農民 自作	農民 小作	農民に非ざる者
同一郡	八七	七六	七一
同一區域	六八	五七	五九
同一農場	三一	三五	二一
總計	一〇〇	一〇〇	一〇〇

るにこれに對して、農村人口特に農村家族は、都市のそれに比して、極めて定住的であることは、一般に知らるゝところであるが、上に掲ぐるアメリカ合衆國のオハイオ州、ユニオン及びバンバート町に於いて調査せる同一農場、同一區域及び同一郡に引きつゞき常住せし農民家族の百分率は、[2] これを例證するものと云へやう。

次に掲ぐる鎌倉市に於ける産業別永住世帯數の調査も亦、同様なる事實を、更に一層明瞭に現はしてゐる。

産業別	全世帯數	永住世帯數
農業	364	280
漁業	366	32
工業	693	283
商業	1005	329
交通業	53	18
自由業	273	14
雜	29	8
不明	7	1

即ちこの表によれば、農業及び漁業に於いては、壓倒的に、永住者世帯が多く、即ち農業では七七%、漁業では九〇%を示してゐる。その他に於いては、率は遙かに低下し、工業に於いては約四〇%、商業では二二%强、自由業に至つては、永住者世帯の割合は、僅かに五%を示すに過ぎない。[3]

次に又都市人口が、農村人口と比較し、水平的地域的移動性がより大であると云ふことは、都市人口は、居住地域を變更し移動するのみならず、居住地域内に於いても亦、住居を屢々變更することによつて示される。即ち農村に

於いては、家は一般に永久的なる場所を意味するに對し、都市に於いては、その人口の大部分は絶へず住居を變更し、住宅、貸室、アパート等を移動する。而してこのことは、統計的資料を擧ぐるまでもなく、これ等の人々が同一の家、室或はアパート等に滯留する期間の長さは、年單位では測定し得られず、月、週或は日單位ですらも計算されると云ふ事實によつて、有力に證明せられ得るであらう。而して以上の如き都鄙人口の水平的地域的移動性に於ける相違は、主として都鄙に於ける職業の性質上の相違、卽ち都市の職業の多くは、安定性に乏しきのみならず、その性質上常に地域的移動を必要とするに對し、農村に於いては、人を土地に繫縛する農業の性質及び都市の大部分の職業階級に比し不動產の所有者並に事業の獨立經營者の率のより高きことによつて。容易に理解せられるであらう。④

さてかくの如く、都鄙人口の水平的地域的移動性に就いて觀察する時、農村人口は都市のそれよりも移動が少く且つより安定してゐることが知らるゝのであるが、然しそれにもかゝはらず、都鄙間に於いて兩者の移動を注視する時、高きから低きへ流るゝ水の如く、人口の自然增加率の高き農村からその低き都市へと流入する一つの流れが見出される。農村は人間餘剩の生產地であり、都市はその消費地とも云ふべく、このことは、人類の歷史に於いて、事實絶へず存續し來つたところの重要な特質であらう。而してかゝる人口の都市集中或は向都の現象は、これを長期に亙つて觀察する時、都市人口は益々增加するに反して、農村人口は次第に減少する傾向が示されるのであつて、たとへば吾國に於ける明治二十二年の都市數三九が、昭和十四年に於いては一四八に增加してゐるのみならず、一般に二萬から十萬以上の都市人口は著しい增加の傾向を示し、反對に五千未滿の農村人口

は著しい減少を示してゐる。[5]

以上は都鄙人口の水平的地域的移動性に就いて述べたのであるが、然らばかゝる現象に關聯して教團は、如何に考察せらるゝであらうか。

II　都鄙教團の變動

先づ第一、都市人口の水平的地域的移動性が農村人口に比して大であると云ふ結果は、必然、都市教團に於いてはその成員の地域的移動が大であり、これに比して農村に於ける教團成員のそれは小であると云ふことは、こゝに述ぶるまでもなく明白に推察せらるゝであらう。今その一班を示すものとして、敦賀市及びその附近村落に於ける教團に就いて、三〇年以上定住する檀徒戸數をみるに、[6]村落七〇ケ寺に於ける檀徒戸數合計二三三二戸の内、三〇年以上定住する檀徒戸數は二二五七戸であつて、その比率は九九%の高率を示すに對し、市内三七ケ寺に於ける檀戸總數は二五三九戸であり、その内三〇年以上定住する檀徒戸數は一六八九戸を示し、その比率は六六%である。而して農村教團に於いては、一般に殆んど信徒を含まざるに反し、[7]都市教團に於いては殆んどすべて信徒を含むが故に、若し信徒戸數をこれに加算する時は、その總戸數は三二五四戸となり、前記比率は五二%に低下する。從つてかゝる結果よりみれば、敦賀市附近に於ける村落教團の成員の極めて定住的なるに比し、市内教團の成員は著しく移動的なることが知らるゝであらう。

次に第二に、人口の都市集中の移動現象に關聯して敎團を考察する時、必然先づ農村敎團の人口數量は減少し、都市敎團の人口受容量は增加しなければならぬ、從つて又農村敎團は檀徒戸數減少して小となり、都市敎團は都市の膨脹するにつれて漸次檀徒戸數を增加して大となると云ふことが、推測せられねばならぬ。[8]

ところでこゝに注意すべきは、農村に於いては一般に、人口の都市集中によつて明らかに知らるゝが如く個人的離村の多い反面に、離村家族は極めて少ないと云ふことである。このことは前述の鎌倉市に於ける永住世帶の調査によつても、その傾向の片鱗を察知せらるゝが、昭和七年全國道府縣より代表的に選定された四六七部落、戸數二八、一〇八戸に就いての調査によれば、他鄕に轉住せる戸數の割合は、地主〇・二一％、小作人〇・四五％、兩者を合しても〇・六六％に過ぎず、又國外移民地に移住せる者の戸數割合は〇・二％、行衞不明となれる戸數〇・一二％であつて、すべてを合しても、離村戸數の割合は一・〇二％に過ぎないことが示されてゐる。[9]

かくの如く、個人的離村の多い反面に、離村家族の極めて少ないと云ふことは、敎團は家族を以つて構成單位とするが故に、農村敎團に於いては、たとひ流出する人口があつても、その構成單位に影響を受くること少く、從つてその大きさは、大體に於いて安定の狀態にあるものと云はねばならない。然しながら、農村に於いては、流出人口及び戸數に對する逆流は特殊の農村を除くの外一般に期待せられず、その損失は殆んど補顚せられざるが故に、長期に亙つては、敎團は人口數量の上よりのみならず、檀徒戸數をも亦次第に喪失し、勢ひ小とならざるを得ないであらう。而してかゝる場合、離村せる獨身者は距離的制約の故に殆んど本寺と無關係であり、同じ

く離村し他に移動せる檀徒家族も亦、離檀はしないけれども、交通の不便或は遠距離の故に、永年の間には自然本寺との關係も稀薄となり、事實上離檀同樣の結果に至ることも多いのが普通である。地域的に封鎖的なる山村或は漁村に於ける教團は、特にこの典型であらう。[10] 然るに都市或は町に近接し、それと比較的交通自由なる所謂衛星的村落に於ける教團は、これと事情を異にする。即ちこの場合、前述の如く離村家族は極めて少なきのみならず而もその内かゝる附近の都市或は町に移住せる檀徒は、距離近く交通又自由なるが故に、本寺との關係は依然として失はず、同樣に移住せる獨身者も亦一家をなせる場合、養子或は入嫁の場合を除くの外、殆んどすべては、近親者或は本寺の緣故にひかれて本寺の檀徒となるのが普通である。而して人口の移住は大體近距離移住の形態をとるが故に、遠距離への離村者に比して近距離へのそれが多く、而も近距離へ移住せる獨身者は一戸を構へたる場合殆んどすべて檀徒となるが故に、かゝる都市附近の衛星的村落の教團は、その外郭に於いて次第に膨脹することになる。即ち長期に亙つては、教團の中心たる村落の檀家數は減少することの替りに、その外圓たる附近都市或は町に於いて、主としてその村落より移住せる獨身者によつてその損失を補顧して尙增加し、次第にその圈を擴大して大となる傾向がみとめられるのである。

今かゝる一例を示すものとして、敦賀市外六ケ村四六部落に於ける七〇ケ寺に就いてみるに、敦賀市より交通便なる二里以内の二九ケ寺中、昭和十年より現在に至る約五ケ年間に、檀戸數を增加せるもの二三ケ寺（内信徒戸數五を增加せしもの一ケ寺）、その增減なきもの六ケ寺であり、而して二九ケ寺の檀家總數は、昭和十年に一

〇六二戸、昭和十六年(五月現在)に一一〇三戸であつて、四一戸の増加を示してゐるに反し、敦賀市より二里以上及び二里以内にあるも交通不便なる寺院をも含む四一ヶ寺に於いては、同年間に檀戸數を減少せるもの二六ヶ寺の多きを示し、その増減なきもの一五ヶ寺、檀戸數を増加せるものは僅か一ヶ寺に過ぎない。而してこの四一ヶ寺の檀徒總戸數は、昭和十年に於いて一二六七戸、昭和十六年(五月現在)に於いては一二二九戸であつて、差引三八戸の減少を示してゐる。[11] 而してこの後者即ち四一ヶ寺の場合に於ける移動檀家數は、敦賀市へ移住二六戸、他の地方へ移住一〇戸、絶家三戸、不明一戸計四〇戸であるに對し、前者即ち二九ヶ寺の場合にありては、敦賀市へ移住一九戸、他の地方へ移住七戸、絶家一戸、不明二戸計二九戸を示してゐる。然るに後者の場合に於いては、移動せる檀家は、殆んどすべて、喪失檀家であつて、敦賀市へ移住せるものゝ内、只僅か二戸のみが本寺と從來と不變の關係を有するに過ぎず、結局移動戸數四〇戸(絶家三戸及び不明一戸をも含めて)の内、三八戸を喪失してゐるに反し、前者の場合にありては、敦賀市へ移住せるものは、交通便にして近距離の故に、依然本寺の檀家として不變の關係を持續して居り、從つて眞の喪失檀戸數は、敦賀市以外への移住七戸、絶家一戸、不明二戸を含む僅か一〇戸に過ぎない。而してその反面に於て、猶四一戸の増加を示してゐるのは、主として敦賀市に移住せるその部落出身の獨身者にして一家をなせる場合の新檀家によるものであつて、かくの如く、敦賀市に於てその喪失檀家を補顧して、却つて増加を示してゐることは、注目すべき事柄と云はねばならない。「二八一頁表參照」

次に、農村教團に對比して、都市に於ける教團の大きさに就いて考察してみやう。そこで先づ考へらるべきこ

とは、人口の都市集中によつて一般に都市が膨脹する割合に、教團も亦一般に膨脹擴大するや否やと云ふことである。それには先づ、向都移動人口の年齢階級を一應分析しなければならない。

都市への移住は、普通成人の初期に初まり、精神的肉體的活動の最盛期に起ると云ふことは、一段に認められてゐるところである。ホエルプトン氏の調査によれば、アメリカ合衆國生れの白人で都鄙間を移住する者の五〇%以上が、一五歳と三〇歳の間にあることが見出され、又ロンドンに於ける人口調査によれば、一五歳より三四歳に至る年齢の男性人口が過剰を示し、三四歳以上の年齢階級群が減少してゐることが示されてゐる。[12] 從つてこのことは、都市の年齢階級が、特にかゝる年齢階級に於いて膨脹すると云ふことを示すものに外ならない。更に、昭和十年六月東京三田區の人口二九、六九四人に就き、純粋家族、アパート居住者、營業及び家事使用人、下宿人、同居人の年齢階級層の調査の結果によれば、一般に二〇歳より三〇歳に至る年齢階級層に於いて著しき膨脹が示され、これに反して、純粋家族のみに就いて云へば、かゝる特色はみとめられない。アパート居住者は又特色を示し全體の六七%は、二一歳より三五歳の年齢階級に集中する。而してその前後の年齢階級層にあたるものは、微々たるものである。使用人の場合は、一六歳より三〇歳の年齢層に集中されて居り、下宿人及び同居人の年齢構成も亦、同樣なことが云へる。即ち一六歳より三五歳に至る階級は、全體の約七〇%の多きを占めてゐる。[13] 以上を通じて、都市移住者の實に半以上は、二〇歳より四〇歳に至る年齢階級層であり、而も大部分は、二〇歳より三〇歳に至る階級によつて占められてゐることが知られる。而してかくの如き移住に於ける年齢陶汰

の重なる原因は、傳統や慣習によつて制約さるゝことの替りに、絶えず愼重に、組織的に熟考し、不斷の變化に應ずる爲の大なるエネルギー、大なる適應力及び壯年者の判斷を必要とすることによるものであることは明らかであらう。

さて以上によつて、都市への移住人口の大半以上は、二〇歳より四〇歳、特に二〇歳より三〇歳に至る年齢階級によつて占めらるゝことが明らかにされたが、今これを都市教團との關聯に於いて考ふるに、先づ第一、これ等の年齢階級は、殆んど教團と無關係なることが推察せられる。けだし、これ等の年齢階級の多くは獨身者であると考へられる、然るに獨身者にして特定の教團に所屬するのは、通例家庭を持つに至つてからであつて、彼等は特殊の場合を除くの外、殆んど教團に所屬することがないからである。それ故、これ等の年齢階級が教團に關係を有するのは、家庭を持つに至つた後であるが、然しながら、それも何等かの機緣によつて、その必要を生じた場合であつて、大半は何れの教團にも所屬せず、所謂浮動の狀態にあるものとみられなければならない。次に又、これ等の年齢階級中、女子は殆んど入嫁によつて入嫁先きの教團に所屬する故、大半無關係であり、又附近村落或は町よりの流入者は、教團に所屬する必要の生じた場合は、殆んどすべて本寺に關係を有し、彼等の教團に所屬する故、これ亦無關係である。のみならず又これ等の年齢階級中には、たとへば學生等の如く、少なからざる一時的滯留者の含まるゝことに想到するならば、これ等の年齢階級は、都市集中人口の半以上を占め、都市膨脹の中樞をなすにかゝはらず、都市教團の大きさには、大なる影響を與へてゐないことが、看取せらるゝであ

らう。

次に都市への流入家族を考察してみる。上述の如く、教團の構成單位となるものは家族であるから、都市教團の大きさに直接影響を與ふるものは、これ等流入家族でなければならない。ところでこれ等の内、都市に於いて新しく特定の教團に所屬する可能性を有するものは、近距離よりの流入家族は大半猶本寺と不變の關係を有するが故に、それ等を除く遠距離よりの流入家族でなければならない。即ちかゝる家族は、距離的制約の故に、自然本寺との關係が稀薄となり、何等かの機緣の下に信徒として、或は又永年の間には檀徒として、新しき教團に所屬するのが普通である。然しながら、一方又何れの教團にも所屬せず、所謂浮動狀態にあるところの移住家族も少くないことが注意せられねばならぬ。[14] かゝる浮動家族が、獨身者にして新しく家庭を持ちて猶何れの教團にも所屬せず、同樣浮動の狀態にあるものと合して、その數の決つして少なくないことは、借庵の[15]如きものゝ多數存在することによつてもその一班を察知せられ得るであらう。從つて都市への流入家族も亦、直接教團の大きさに影響を與ふるとは云へ、その割合には著しき影響を及ぼさざることが看取せらるゝのである。

右に述べたるところによつて、都市教團は、都市へ流入する獨身者及び家族の割合にはそれによつて大なる影響を受くることなく、從つて都市への人口集中によつて一般に都市の著しく膨脹する割合には、大とならざることが明らかとなるであらう。而も又一方都市に於いては流出する人口も大なるが故に、個々の教團に就いて云ふならば、常にその大きさは、農村教團の安定的なるに比し、大小の變動を免れない。然しながら、一般には、都市

に於ける人口の著しき膨脹によつて都市教團は、一方流出人口によつて檀信徒を喪失しながらも、猶他方に於いて、流入人口によつてそれを補ひ得て漸次大となる傾向を有することが推測せられる。次に示す敦賀市内に於ける寺院の檀信徒總數と村落に於けるそれとの比較は明白にこれを示してゐる。

	檀徒總戸數	信徒總戸數	檀戸總戸數	信徒總戸數
市内三十七ヶ寺に於ける檀信徒總戸數	昭和十五年度 二四七五	四五八	二三二九	
	昭和十六年度 二五三九	七一五	二三三三	五
増加數	六四	二五七	三	五
村落七十ヶ寺に於ける檀信徒總戸數				

右市内三七ヶ寺の内、檀信徒戸數を増加せるもの三一ヶ寺、その減少せるものは六ヶ寺であるが、總體に於いては、約五ヶ年間に檀徒六四戸、信徒二五七、計三二一戸の増加を示してゐる。然るにこれに對し、村落寺院に於いては僅かに八戸の増加をみるのみである。即ち前述の如く、（前表參照）七〇ヶ寺の内二九ヶ寺に於いては四一戸を増加せるも、四一ヶ寺に於いて三八戸の減少を示してゐるが故に、七〇ヶ寺の檀家總數に於いては僅かに三戸の増加あるのみであり、信徒戸數を合算するも猶八戸に過ぎないのである。[16]

以上吾々は教團成員の移動によるその數量の變動に就いて述べたのであるが、要するに地域的に封鎖的なる農村に於ける教團は、一般に農村の戸口減少の傾向の影響を受け、長期に亙つては、次第にその構成單位たる檀徒を喪失して小となる傾向あるに反し、都市或は町附近に於ける所謂衛星的農村に於ける教團は、前者と同樣の影響を受けつゝも、都市或は町にその圏を擴大することによつて、却つて漸次大となる傾向がみられる。これに對

して都市教團は、一般には、これ亦檀信徒を漸增して次第に大となる傾向がみられるが、然しながら都市の膨脹する割合には大とならないことが知らるゝのである。

さて最後に、然らば右の如き成員の移動によつて、教團の構成單位は質的に如何に變動するであらうか。

既に述べた如く、地域的に孤立せる農村教團に於いては、流出人口の割合に流出戸數は極めて少ないが、然しながら一般に流出に對する逆流卽ち入村は主として入婚者なるが故に、教團の構成單位はすべて檀徒であり、教團への新しき所屬者卽ち信徒は、こゝでは期待し得られない。かゝる結果、檀信徒の增加はなきのみならず、長期の間には教團は漸次小となる傾向にあるとは云へ、その構成單位が古來からの檀徒のみであると云ふことは、教團をして極めて同質的にして安定的ならしめる。然るに都市或は町の附近に位置する農村教團に於いては、教團は漸次大となる傾向を有するにかゝはらず、これ亦殆んど信徒を含まず、その構成單位はすべて檀徒のみであるが、然しながら擴大せる教團の外郭に於ける成員卽ち都市或は町への移住者は、漸次都市化し異質化するの傾向を帶びる結果本寺との關係も緊密ならず、實質的には殆んど信徒と異ならざるが故に、地域的に孤立せる農村教團に比して、その同質性の毀損せらるゝことは免れ難い。然しながら一般に農村教團が信徒を含まず、構成單位として檀徒のみを有することは、その地盤も亦强固であると云ふことが出來るであらう。然るに都市の教團に於いてはその事情は異る。卽ち人口の都市集中によつて都市教團は前述の如く、一般に漸次膨脹し大となる傾向にあることがみとめらるゝのであるが、流出する檀信徒を補顚して猶膨脹することは、主として新所屬の信徒に

よるが故に、かゝる新陳代謝によつて古き檀家は失はれ、檀徒に對する信徒の割合は漸次大となるを免れない。たとへば前記敦賀市寺院の場合をみるに（前表參照）、約五ヶ年間に於ける檀徒戸數の增加率は僅か二・五％なるに反し、信徒戸數のそれは五四％の高率を示して居り、檀徒戸數に對する信徒戸數の割合は、昭和十一年度に於いて二〇・二％、昭和十六年（五月現在）に於いて三二％を示し、漸次その割合が大となる傾向がみとめられる。かくの如く、都市教團に於いてはその成員が移動によつて常に新陳代謝し、而も檀徒に對する信徒の割合が大となるが故に、著しくその同質性を失ひ、その地盤も亦脆弱化せざるを得ない。

以上述べたるところによつて、教團成員の地域的移動及びその數量上構成上に於ける變動より測定せられたる農村教團は、一般に安定的であり同質的であるに對し、都市教團は極めて動搖的であり異質的であることが、略々明らかにされたと思ふ。ベツカーは、近隣的、社會的、精神的に孤立し封鎖せられたる社會を神聖社會（sacred society）と云ひ、近隣的にも社會的にも精神的にも可接的（accessible）なる社會を世俗社會（secular society）と稱してゐるが、[16] かゝる名稱は、農村教團及び都市教團に對して夫々與へられる時、最も適當なるものと云ふことが出來るであらう。

① P. Sorokin, prinsidles of rural-urban sociology. p. 29.

② ibid., p. 30.

③ 奥井復太郎氏「現代大都市論」四一四―四一五頁より引用。

④ P. Sorokin; op. cit. p. 34.
尙都市人口の地域的移動性に就いては、住居の變更を伴はざる移動卽ち所謂振子的移動に就いても亦注意せられねばならぬが、今はそれにふれない。

⑤ 猪間驥一氏「都市人口」及び奥井復太郎氏「現代大都市論」二四六頁參照。

⑥ 敎團に關する統計資料なき爲、以下こゝに使用する統計數字はすべて、本年五月敦賀郡（一市六ヶ村四六部落）に於ける佛敎各宗を含む寺院一〇七ヶ寺（但し無住及び調査不明の一六ヶ寺を除く）に就て調査せる資料の一部に據るものである。

⑦ この點に就いては後にふれる。而して檀徒と信徒との間には、從來一般に確定せる區別は立てられてゐない。本調査に於いては、特定の寺院に五年以上所屬し、他の寺院と事實上所屬關係なきものを檀徒とみなした。

⑧ 從來敎團は家族が構成單位となつて居り、その人口調査は困難にして正確を期し難きが故に、便宜上戸數を中心に考察をすゝめる。

⑨ 鵜澤忠氏、農村社會調査の一報告（日本社會學年報第三輯）。

⑩ かゝる場合敎團の損失を補ふものとして一應考へられるものに入婚者及び分家がある。然しながら前者は敎團が家族を構成單位とする限り直接影響なく、後者も亦極めて少數であつて大なる影響を與へてゐない。

⑪ 長期に亘る觀察が望ましきも、檀信徒名簿を整備せる寺院少き爲、止むを得ず正確を期する爲短期間の調査に基くことにした。

⑫ P. Sorokin; op. cit., p. 541.

⑬ 奥井復太郎氏、「現代大都市論」二七八—二七九頁。

⑭ 移動家族をしてかゝる浮動の狀態におくところの主なる原因は、本寺と移動地に於ける寺院との間に檀徒の移動に際し、

何等の聯絡のなきことによるものと云はねばならぬ。これは今後考慮を要する問題であらう。

⑮ 寺院もなく教團の組織もなく、多く民家に居住し、所謂浮動檀信徒の主として讀經の需要に應ずるものであつて、名古屋地方に於いてはこれをシヤクアンと稱する。けだし都市に於いてのみ見らるゝ現象である。

⑯ 尙これに關しては、敦賀市並にその附近村落に於ける流出流入人口及びその增減と比較しなければ、明瞭にされぬと考ふるも、今はその自由を有しない。

⑰ H. Becker; Processes of secularisation. (Sociological Review, April-July and October, 1932, pp. 141-142.

(三)人口の社會形態學的作用と教團

人口は、元來、一社會團體內に於ける人間の單なる統計的數量的集團であつて、それ自身は何等社會ではない。然しながら、社會集團は、人口をその構成の必須的な基礎的な要素とする限り、その社會團體に於ける人口の移動、而して又人口の構成並に數量的變動等は、必然的にその社會に對して諸々の作用或は影響を與ふるものでなければならない。デュルケームが「社會分業論 De la division du travail social. 1893」に於いて、社會成員の異質性を發生せしめ顯著ならしむるところの根本的な條件を、人口增加に認めてゐることは周知の事實であらう。卽ちデュルケームによれば、社會は同質及び類似の個性を基調とする機械的連帶の社會より、異質的個性を基礎として成立する高級なる有機的連帶の社會組織へと進展する。而してかゝる個性の同質性より異質性への分化促

進の根本的動因は社會の容積(le volume de la société)と動的密度(la densité dynamique)の增大に外ならない。而して彼が云ふところの社會の容積とは、社會構成要素の數量卽ち人口數であり、動的密度とは、社會構成要素の精神的凝集度であつて、卽ち社會の人口數量の增加從つて又精神的密度の增大は、個人を複雜多岐なる關係の下におくことになり、かゝる結果、各個人は比較的に相互に無關心或は冷淡となり、集團的拘束力が減退して來る。然るに集團意識の拘束力は、個人を類型化する傾向が强く、從つて集團意識が强ければ强い程、個人的變異が困難なるが故に、かゝる拘束力の減退は個人の異質化を伴ふて來ると云ふのである。ジンメルも亦、社會成員の異質性が明瞭になり、個性の發達してゆくことは、社會圈の擴大によることを說く。卽ち社會圈の狹少なる場合にありては、成員の集團によりて繫縛せらるゝ程度が大であり、個性は集團に融合して現はれない。然るに社會圈の擴大するに從つて、個人は地理的經濟的精神的諸關係に於いて、從來の限界を超へて、より廣きより新しき關係を選ばんとする遠心的傾向を現はし來り、從來その集團のみに妥當せる諸規範は次第にその拘束力を失ひ、成員は自由性を得ると共に、必然個性も發達して來ることを說いてゐる。[1] 然るにジンメルの云ふ社會團體の擴大とは卽ち人口の增加に外ならぬことが知らるゝのである。

さて右の如く人口の增加に從つて、集團の社會圈が狹小にして封鎖的なるものより、より擴大せるより開放的なるものに展開すると共に、更にそのことによつて社會成員間の社會的諸關係が影響さるゝとするならば、上述し來れる教團に於ける成員の移動その量的及び質的變動の有無或は大小は、又教團の社會測定の有力なる指標と

ならねばならない。然らば、かゝる成員の移動によつて教團は、如何に變動せしめられるであらうか、以下それに就いて考察しなければならない。

ところで教團は、特定の佛、その所説の法及びその信奉者(僧と俗)より成立する。卽ち信奉者は法に隨順して佛を信仰すると共に、その共通の信仰に基く共屬感情によつて相互に結合する。而して僧侶は自ら信仰に精進すると共に、信奉者に所説の法を教示して、彼等を教化指導しその統制の中心となるところに教團が成立するのである。教團は本來かくの如き一般構造を有するが故に、以下考察をすゝむるに當り吾々は先づ教團に於ける成員相互の關係、その信仰及び教團成員と僧侶との關係に就いて、それが如何に變容されるであらうか、順次考察をすゝめたいと思ふ。

① G. Simmel; Ueber soziale Differenzierung. 1890. (Kap. II. Ueber Kollektivverantwortlichkeit 及び Kap. III. Die Ausdehnung der Gruppe und die Ausbildung der Individuuität 參照)。

I　教團成員の社會關係

現代に先立つ封建時代に於ける農村の封鎖性が、如何に嚴重なるものであつたかは、農村の負つてゐた封建的桎梏からも直ちに明らかである。古き時代に諸國の農奴は、土地の附屬物として扱はれてゐたが、德川時代にもあらゆる手段によつて、農村は都市から隔離され、事實上この時代の農民の移轉、轉住は極めて稀であつた。② 卽

ち農民の婚姻、旅行、移住を初め奉公人の召抱等戸籍上一切の異動に就いては、幾多煩瑣なる手續を設け、農民を土地に固着せしめ移轉の自由を束縛せんとする政策、交通の不便と危險、外來者に對する農民の排他性などは、農村を著しく封鎖的ならしめたのである。

さてかくの如く著しき地域的封鎖性に基く農村社會に於ける人間相互の關係には、如何なる特殊性がみらるゝであらうか。先づかゝる社會に於いては地域的移動性の小なるが故に、外部よりも亦內部よりも新らしき生活樣式の生ずべき蓋然性をかき、從つてすべての行爲樣式は、父祖以來の傳承の反覆習熟によつて規定せられ、これに反省批判を加へ、或はこれに背きて別異の樣式を立てんとするものゝ現はれるべき原因が存在しない。[2] かくて一切の生活は慣習的に固定化し、慣習が主としてこの社會の統制の中心となり、而も他との比較に於いてこれを分析し批判することがないから、慣習は固く保持せられて非常に力强いものとなる。のみならず、他面又、かゝる慣習の支配は宗教と合することによつて愈々嚴に且有力となり、あらゆる領域に亙つてその細部にまで支配を及ぼし、封鎖が破れたる後に於いても、急激には容易に變革せられない。而して行爲樣式が慣習的に共通なる限り、社會成員の行爲は相互に一致し、一人の行ふことに他の者も精通熟達するが故に、彼等の間には行爲を共同にすることが可能である。かくの如く、あらゆる一切の行爲樣式が、傳承、慣習によつて齊一的に規定せらるゝのみならず、又かゝる社會に於いては、限定せられたる狹隘なる地域に於いて而も限定せられたるものゝみを、自己の生活の對象とするが故に、その對象も亦同一乃至類似せるものでなければならない。從つて、行爲

は內容的具體的にも類似し、各成員の意識內容も、微細なる點に至るまで一致する。③かくの如く地緣に基くのみならず、宗教、慣習及び生活樣式等の信念的非理智的要素の類似に基くかゝる社會の人間相互の關係は、最も緊密且つ强固なるものであることは云ふまでもないであらう。次に又、人口少なく社會的空間の擴大せざるかゝる社會は、常に對面の社會である。日常に於ける相互面識の相互交涉は、その間に親密なる關係を成立せしめるのみならず、而も生活の內容も行爲も類似するが故に、各成員は生活のあらゆる方面に亙つて、全面的に具體的に、細部に至るまで、相互に熟知了解し、時としては彼等の下着をさへ理解するに至る。④從つて、その關係は必然全人格的であつて、一面的皮相的に止ることなく、一面の接觸は、同時に他のすべての側面の開放を意味する。ともすれば粗野とも、無作法ともみらるゝかゝる社會の成員の行爲の特性は、けだし外交的辭令の要なく、洗練された儀禮作法の必要もなきかゝる關係に基づくものに外ならないと云はれやう。かくして全人格の開放に基く熟知親愛は、生のあらゆる領域に亙るが故に、成員の喜びも悲しみも、又惱みも、單に自己に限られたるものとしてではなく、すべてのものの喜びや悲しみとして受けとられ、それが信仰を通じて共に語られることも多く、宗教的同情や理解もこゝでは容易に成り立ち、それが成員に對して希望を高め勇氣を與ふる力となり、又道義制裁の基礎ともなるのである。而して以上の如きかゝる社會の成員相互の關係交涉は、嚴重なる社會的封鎖に基く成員の永住によつて、永く繼續せられ堅固に持續せられて急激なる消失はない。

現代に於いては交通、運輸、通信の發達によつて、一般に農村の封鎖性は、水平的にも垂直的にも著しく崩壞

したとは云へ、猶交通不便にして地域的に孤立に近き農村部落に於いては、右に述べたるが如き人間相互交渉の特殊性は、大なる偏差なくして妥當するであらう。而してかゝる部落に於ける教團が、その圏を部落の區域と同一にする限り、正にこのことは、教團成員の相互關係にも亦妥當すると云はねばならない。然しながら、多くの場合、農村教團は必ずしも農村の區域と一致せず、一部落ですら二或は三の同じ或は異る教團が、部分的に累積せる場合も少しとしない。然らばかゝる場合、右に述べたるが如き成員相互の關係の特殊性は、教團に於いては如何に丐められてゐるであらうか。更に又教團圏の累積に基く宗教的異質性の混入によつて、農村自體は如何にその共同性に影響せられてゐるであらうか。

先づ第一、一部落を中心とする教團の他村乃至他部落への圏の擴大は、教團の中心部と擴大せる部分との間に、地域的距離の故に密接なる相互交渉は少く、教團としての全般的共同關係が存するとは云へ共同生活のより大なる部分は各部落に歸屬するが故に、必然その間に於ける社會的距離の存在は否み得ず、從つて部落の區域とその圏を同一にするところの教團に比して、その内部に於て部分的に社會的空隙の存在することは免れないであらう。然るに、都市或は町に近接するところの農村に於ける教團の如く、その圏が都市或は町にまで擴大し、都市或は町のそれと交錯する場合に於いては、教團の中心と擴大せる部分との間のかゝる社會的空隙は、更に大となる。けだし交通、運輸の便によつて、かゝる農村教團は地域的に封鎖破れて開放的となり、從つて封鎖性に基く人と人との關係の特殊性も變形するに至ることは云ふまでもないが、猶そこは慣習の強く支配する社會であり、日

常面識の相互作用が行はれ、相互熟知の緊密なる社會であるに反し、擴大せる部分に於ける成員は、その都市化の故に著しく異質化し個別化するからである。即ち農村より移住して、教團のかゝる擴大せる部分を形成する成員は、舊定住地たる農村に於いて、彼の意識內容を强く占め、彼を常に拘束し、彼をして自動的に慣習的に反應せしめたる社會强制力或は規範力より意識的に解放せられる。換言すれば、舊定住地に於ける傳統及び慣習の監視或は繫縛より離脫して、自由行動の餘地を與へらるゝと共に、新らしき外圍に適應して、著しく都市的個性を增すに至り、かゝる結果教團に對する共同關係も稀薄となり、次第に遠心的傾向を帶びて來るのが普通である。而して前述の封鎖的なる農村教團に於いては、擴大の部分と教團の中心部とに社會的距離が存するとは云へ、擴大部分の成員相互の關係は、同一部落の成員として極めて緊密なるに反し、かゝる教團に於ける擴大部分の成員は、その移動性の故に相互に地緣關係はなく、又生活の對象も行爲の樣式も異るが故に、從來に於けるそれ等の一樣性乃至類似性は失はれて、相互の間に緊密なる類似の結合は成立しない。從つて、かゝる教團は、その中心部に於いて共同社會的形態たる代りに、その外郭に於いて利益社會的形態を有する部分を抱合することになり、而も既に述べたるが如く、成員の增加は教團の中心部に於て停止し、その外圓に於いて行はるゝが故に、外圓より次第に異質化が增大すると同時に、それは又地域的開放の故に、漸次中心部に浸潤することは必然であらう。

第二は、教團圈の累積乃至錯綜は、農村に於ける場合、夫々異る宗教の混在によつて、同質的なる部落を宗教的に異質化せしめ、而して又普通一般に、集團內部の結合が緊密の度を加ふるに從つて外部に對する排斥的傾向

が強く現はるゝが故に、教團內部の結合の強き場合には、常に同種或は異種の教團の間に排他的傾向が現はれ、教團の所屬を異にすることによつて、必然部落成員の緊密なる相互關係が毀損せしめられることが、考へられねばならない。然しながら、一般に農村に於いては、特殊の事情の存在せざる限り、教團の對立或は積極的なる排他性はなく、特に同一部落に於いては、信仰を異にすることのみに基くところの成員間の社會的距離は存在しない。[5] 然しこのことは、農民が信仰に弱く、他の異る信仰に對して開放的であり、自己の信仰に退嬰的であることを意味するものではない。むしろ一般に、農村に於ける教團の信仰は強固であり、その限りに於いて他の異なる信仰に對して封鎖的であるが、然し同時に、相互にその特性を認めて尊重し、相互に極めて寛容であることが普通である。[6] 而してこのことは、一面部落共同體の結合の緊密性に基くとは云へ、他面それ以上に、佛教の極めて廣い普遍的觀念によるものとみることが出來るであらう。

以上に於いて、吾々は農村教團に於ける成員の相互關係の特殊性に就いて述べたのであるが、然らば次に、かゝる特殊性は、都市教團に於いては如何にみられるであらうか、近代社會に於いては、過去の封建的社會に於ける封鎖性の崩壞によつて、個人の移動は、垂直的にも水平的にも、極めて自由なる社會であり、特に近代都市はその典型的なるものと云ひ得るであらう。卽ち近代都市は、垂直的移動の著しく行はるゝ社會であるのみならず、水平的地域的移動に對しても亦開放せられた社會である。かゝる社會的移動の大なる都市從つて又そこに於ける教團に於いては、その成員は生のあらゆる領域に於ける不斷の變化を免れ得ない。常に絕えず多くの新しき生活

狀況や生活樣式が與へられ、從つて社會樣式も亦多樣化し、個人の內的素質の差異は著しく、而して分業の發達は更に個別化を增大する。而して成員の行爲の對象、內容、樣式に於ける一樣性乃至類似性の喪失に伴ひ、一方個人は只特定の目的を特定の形式に於いて追求することに於いてのみ、相互交涉の共通の地盤を有することになり、他方又、農村に於けるが如き慣習的に確立せるすべて傳來の樣式の齊一的な支配力は破壞され無力となり、テンニースの所謂共同社會的規範（Gemeinshaftliche soziale Normen）よりも利益社會的規範に（Gesellshaftliche soziale Normen）優位的に支配される結果、愛着の要素は影をひそめ、利害の念が重に作用して成員相互間の關係を規定するに至ると同時に、絕えざる移動性の故に、こゝに於いては最早、農村に於けるが如き永續的な相互交涉は成立し難く、相互の熟知親近性、交涉の具體性もみられない。從つて又、相互の接觸は一面に止り、他の側面を開放しないと共に、相手に開放することも期待せず、而も交る一面と云へどもその深さに常に限度が考へられるが故に、相互に全體の風格或は個性を知ることはこゝに於いては望み難い。都市教團が都市を地盤とする限り、以上の如き都市に於ける人間相互の關係の特殊性に基底をおくところの都市教團は、農村の教團に比し、その地盤に於いてはるかに脆弱性を有することは爭はれぬであらう。

要するに、農村教團に於いては成員の地域的移動性の極めて低いことによつて、一般に教團成員は同質的なるのみならず、相互の關係は、永續的、全人格的、具體的親和的の故に極めて緊密であり、從つて教團に對する共屬意識も亦顯著なるを特質とする。而してこのことは、農村教團に於ける信仰に對して確固にして素朴なる特性

を與ふる實質的背景をなしてゐると云ひ得るであらう。然るに都市教團に於いては、成員の大なる移動性の故に、各教團圏は相互に判別し難きまでに錯綜複雑するのみならず著しく擴大疎開し、成員の接觸の範圍が廣さを加へると共に、接觸する人々は不斷に代謝するが故に、成員相互の關係は多くは一時的、皮相的或は未知の關係に止り、教團の全體的團結は、教團の中心たる寺院或は僧侶を通じての間接的なる結合によりてのみ僅かに支持せらるゝに過ぎないであらう。然るに僧侶と教團成員との關係も亦、成員の移動性の故に舊知の永續的なる關係を有する成員卽ち檀徒は次第に減少し、新來の從つて皮相的なる關係を有する成員卽ち信徒の漸增によつて脆弱化せざるを得ない。以上の如き都鄙教團に於ける一般的社會關係構造は、それ故に、多少極端なる比喩を以つてこれをあらはすならば、農村教團のそれはは車軸によつて中心軸につながると共に、その車軸は同時にタイヤによつてつながる車輪とも云ふべく、これに對して都市教團のそれは中心軸及び車軸のみのつながりを有する風力計風ぐるまとも云ふことが出來るであらう。次に同樣の觀點から教團に於ける信仰に就いて考察してみやう。

① 臼井二尙氏、『現代農村の社會形態』、思想(第一六九號)一四九頁。

② 臼井二尙氏、『社會發展の論理』、理想(第五六號)五〇頁。

③ 臼井二尙氏、前揭命文、五六頁。

④ P. Sorokin; Principles of rural-urban sociology, p. 53,

⑤ 普通所謂教團の對立なるものは、主に寺院と寺院との對立である。

⑥ ソロキンも亦農民の異教に對する寬容性を論じてゐる(P. Sorokin, C. Zimmerman and C. Galpin, A systematic source

book in rural sociology. pp. 383-385.)

II 信仰

複雜なる社會集團に於ける宗教心(Religious mentality)は、種々なる文化及び時代の信仰と儀禮の集積であり、この意味に於いて近代に於けるそれは、前時代の宗教的なる盲昧な文化の殘滓と殘存物を含んでゐる。從つてその信仰が一つの純粹なる宗教形式に屬してゐる社會集團を見出すことは困難であるが、然しながら、このことは、すべての社會集團の信仰及び儀禮が同樣であると云ふのではない。一般に個人的にも社會的にも、信仰及び儀禮は、その自然的社會的背景に依存する部分が大であり、從つて前述の如き農村に於ける社會關係乃至環境が都市のそれと甚がしく異るところから、農村に於ける信仰及び儀禮は、あらゆる時代あらゆる國に於いて宗教の多樣にかゝはらず、その特殊性を闡明にする。①

而してかゝる特殊性の最も顯著なるものは、第一農村に於ける一般信仰及び儀禮が、農耕と密接なる關聯を有すると共に、その儀禮が著しく共同性を帶びてゐることであらう。②而してこのことは、特に農村の民間宗教に於いて最も著しく窺ふことが出來る。近代文化の高度に發達せる社會に於ける民間宗教は、その種類も多くその形態も亦複雜であるが、一般に都鄙を通じて民間宗教として顯著なるものは、癒病に關する禁厭、祈禱、死者に對する弔葬の察儀と廣義の祖先崇拜であらう。而して都市に於ける民間宗教の多くが、主として商運の隆盛、財寶

の獲得等の福德好運を祈禱し而も個別的に行はるゝに對して、農村に於ける民間宗教の特に根幹をなすものは、それが耕耘、播種、收獲等と密接に關聯するところの農耕に關する信仰及び儀禮であつて、それ等は殆んどすべて慣習と固く結合し、而も多くは部落を本位とするところの集團的形態に於いて行はれる。卽ちかゝる共同祈禱は、多くは年神、田神、水神、道祖神、龍神、その他の神佛等を主なる對象として行はれ、たとへば道切り、蟲送り、雨乞、風祭等所謂年中行事として毎年の祭事曆の大半を占め、而して大多數は部落を單位としてその農事繁榮乃至幸福を目的として共同的に行はれてゐる。而してかゝる民間宗教は、元來教團としての組織を有せず、宗派の正統な教義にも據らず、慣習と同化し、實際に卽して古來より一般に根强く普及して居ると共に、佛教より廣汎且深刻なる影響を受け、それと密接なる關係を有し從つて各教團の信仰と相卽して農村の一般信仰を形成してゐる。而してその觀念形態のみならず、その行動形態卽ち儀禮の形式も亦多分に佛教的な祈禱法要の形態を採用するが故に、特に祈禱を主とする教團に於いては、一面に於いて兩者は全く結合してゐることがみられる。然しながらかゝる民間宗教に於ける儀禮は、固より必ずしも正當なる信仰に基いて行はれるものではなく、多くは古來より固定せる慣習に從ふものに外ならないが故に、信仰厚く教團意識の强いところに於いては、かゝる民間宗教に關聯せる慣行に乏しく、たとへば眞宗教團の如く祈禱を容れざる教團に於いては殆んど認められないのが普通であり、たとひ認められるゝにしてもその影は薄い。而して前述の如く農民の生活對象及び行爲樣式の類似性乃至共通性、相互の熟知親近性は、あらゆる營みの共同を可能ならしむるが故に、農村に於いては、かゝる民間

宗教のみならず教團の儀禮も亦共同に行はるゝこと多く、たとへば眞宗教團に於ける報恩講の如き普通一般に祭禮と共に村の重要なる行事の一つであり、其他念佛講や葬儀或は家庭に於ける命日法要すら親族近隣の共同によつて營まれることが多い。かゝる儀禮に於ける共同の營みが、教團に於ける成員相互の熟知親近性を更に一層深めることに著しく役立つことは、見逃し難き事實であらう。然るに都市に於いては、その生活對象は複雜多樣であり從つてその行爲も亦異り、かゝる結果成員相互の熟知親近性、共同性は衰退するが故に、教團及び各家庭に於いても亦農村に於けるが如きかゝる著しき共同性はみられない。而して農村に於いてかくの如く宗教的儀禮が共同に營まれる爲には、自然各人共通の便宜なる期間が選ばれるが故に、儀禮の多くはすべて農閑期に行はれる。かく宗教的儀禮が農耕時期に重きをおかれ所謂季節的變動のあることは、けだし都市に比して農村教團の特色をなすものであらう。

更に又農村信仰の特殊性はその强靱性であらう。元來農民の信仰は、地域的封鎖性の故に父祖傳來の傳統によつて忠實に嚴重に繼受され、そこには疑義のはさまる餘地なきのみならず、各個人は幼時より全く同質的な宗教的環境の中に生育し、外來の新文化の刺戟を受けること少なく、從つて多くの反對的な批判的な觀念との比較に於いてこれを分析し批判する機會に惠まれざるが故に、すべて彼等の信仰を以つて自然的な而かも正しいものとして無批判的に受け入れ易い。かゝる結果農民の信仰は一般に强く且堅固であり、[3] 從つて信仰の盛んなるところに於いては、信仰が日常生活に深く浸透し、村の精神或は行爲の原理となり、その拘束力極めて强く、不文の憲

法としてそれに照らして相扶け相誡め道義的自治の原理となつてゐる。その信仰より來るところの宗教的儀禮も亦、それ故に嚴重に行はれ、而も永き傳來の故に殆んど慣習化し、新しき生活樣式を嫌ふ嫌新性或は愛古性の農村心理によつて傳來の形式が固く保持せられ、その簡略化或は改變は容易にみられない。所謂新興宗教が主として都市に於いて流行し、農村に於いて容易に傳播し得ないのも、又一面右の事情に基くものと云ひ得やう。

然るに教團成員の移動的にして從つて又異質的なる都市教團に於ける信仰は、右の如き農村教團のそれと全くその事情を異にする。即ち都市に於いては多くの異る宗教が存在し、各種の宗教制度の間の鬪爭や對立は、絶えず成員の宗教觀を刺戟する。この對立は相互の批判となり、批判は相對立する宗教の神聖さを甚だしく弱める。而して成員の移動性の故に教團圏は入り亂れて錯綜し、同一區域に種々なる異教徒が混在し、而も社會的接觸が廣汎でありより多角的なるが故に、各種の宗教に接觸するのみならず、農村に於けるが如き傳統や慣習の束縛を受くること少なき爲、新興宗教の如き他の宗教の受容乃至傳播、普及を容易ならしめる。かくて彼等は多くの教理に接觸する結果それ等に就いての批判分析或は自己反省の機會に數多く惠まれる。かゝる環境は必然彼等の信仰に動搖的な影響を與へ、在來の信仰に固執することを困難ならしめ、宗教的相對論乃至混合論が不可避的となり、批判的、懷疑的、詭辯的、宗教自由主義なるものゝ發展の大なる契機を與へる。[5] 從つて又、こゝに於いては家庭に於いて行はるゝ宗教的儀禮も農村に於けるが如き保守性、齊一性はなく、便宜的に恣意的に簡易化せられ或は改變せられ易く、各教團に於いて規定せられたる夫々獨自の儀禮は嚴重に保たれ難くなるのみならず、信仰と儀

禮とは、信仰の懐疑的、批判的なるに伴ひて次第に分化し、その內面的聯關は失はれて、儀禮は單に形式的に慣習的に行はるゝに至る結果、僧侶との間の單なる商取引的性質を帶びる傾向すら生じて來ることも否まれない。

ところで教團の構造は、既に述べたるが如く、家族をその基底とするが故に、右の如き都鄙教團に於ける信仰及び儀禮の特相は、又都鄙に於ける家族の性格と密接に關聯し且つそれに深く根ざしてゐることに注意せられねばならないであらう。元來農村家族は一つの經濟的團體であると同時に又教育團體であり、その他勞働、娯樂等家族の機能に應じて、夫々の團體が家族の上に累積し統一的全體をなしてゐる。[6] 信仰に於いても亦一つの共同團體であつて、家族はすべて同一の信仰を持ち、入嫁、養子も共にその家の信仰に屬し、家族は彼等に獨特の信仰體驗を有する。家族內に於ける宗教的儀禮はすべて家長を主腦として行はれ、これ等は信仰と共に世代から世代へと忠實に嚴重に傳へられて毫も改變せられず、家の永き存續と共に、その樣式は固定化し、その家の家風となり個性となつてゐる。而してかゝる共同體驗の統一的全體の整序の中心となるものは家長であり、家長をして一家の中心たらしめ優位を保たしむるものは一家の傳統であり祖先崇拜である。卽ち日常の生活は傳統を通じて行はれ、すべては祖法の定むるところとして嚴守せらるゝが故に、傳統は一家の根本原理であり、又生活の規範であつて、これに背くことは卽ち祖先に背くことに外ならない。然るに祖先と最も密接なる關係を有し、且つ又傳統に最もよく通曉する者は家長であつて、卽ち祖先を介して家長の權威が確保せらるゝと共に、又家長によつて祖法が家族員に傳承され、こゝに家長を中心として宗教的共同體が形作られるのである。かくの如く農村に於ける

生活は、すべて家族内に集中され、而も傳統を通じて家長中心に行はれ、宗教的にはそれ自らが一つの教團をなすが故に、信仰は家長を通じて深く家族の日常生活に浸透する。

然るに右の如き家族の形態は、地域的封鎖の崩壞に伴ふ人の地域的移動につれて、次第に變化して來る。卽ち從來の齊一的なる行爲樣式は複雜になり、新しき行爲樣式への順應は靑年者をして却つて巧緻たらしめ、從つて祖法傳來の妥當性或は束縛は次第に力を失ひ、慣習的傳來的行爲に基礎を有するところの家長の權威も亦減じて來る。特に都市に於いては職業の世襲が困難であり又多數の職業が存在する結果、農村に於けるが如く、同一職業を通じて親子の間に同一意味を體得することは困難であるのみならず、更に又一家の傳統を是認しその上に築かれたる教育も、家族外の教育機關の整備によつて衰退し、兒童は家族の影響を受くること少なく、かゝる結果は家族成員は相互に教養の程度を異にし、趣味を異にし、すべて體驗する世界が異るが故に、家の傳統に大なる支障がもたらされる。從つて信仰や儀禮も亦傳承或は慣習の擁護なきのみならず、都市の特徵たる個性の理性化合理化の故に、傳承せられたる內容或は形式のまゝにては受け入れられ難く、形式化され改變され易く、一家信仰する宗教を異にする場合も生じて來る。從つてかゝる雰圍氣に生育せる兒童は、一般に農村の兒童に比して宗教的情操に乏しく長じて宗教に入り難い傾向を誘致されることは言ふを待たないであらう。⑦

① P. Sorokin and others, A systematic source book in rural sociology. p. 357.

② 農村に於ける信仰が、一般に農業上の諸現象と密接に關聯せる觀念によつて色づけられ普及されて居り、從つてその宗

教的儀禮、祭禮、祈禱等も亦農業的性質を有してゐることは、ゾロアスタ教、ヒンヅー教、モルモン教、キリスト教等あらゆる宗教に於いてこれをみることが出來るであらう。

③ 現在の民間宗教の有力なる部分を占めてゐるのは、死者に對する弔葬の祭儀と廣義の祖先崇拜とである。而してこれ等の儀禮は多く佛寺との關係に於いて營まれ、各宗派としてもこれを重要な宗教的行事として公認し、實質的にも僧侶の重要な職務となつてゐる爲、或る意味では最早民間宗教とは云ひ得ない狀態にすら置かれてゐる。（宇野圓空、『日本民間宗教の民族學的性格』、思想）第一六九號六九頁））。

④ P. Sorokin and Others, op. cit. p. 380.

⑤ ibid., p. 375. p. 380.

⑥ 都市に於いて多く行はるゝ月參り或は逮夜參り等と稱するものは、この種の傾向を生じ易い。

⑦ P. Sorokin and others, op. cit. p. 344.

鈴木榮太郎氏『日本農村社會學原理』二三七—二三八頁。

⑧ ソロキン及びチンマーマン兩氏は、ミソネタ大學の學生に就いて都鄙に於ける家族の機能の相違を多くの項目に關して調査してゐるが、その內宗教に關するものは、都鄙に於ける信仰の相違を明瞭にあらはしてゐる。（P. Sorokin and Others, op. cit. pp. 25-26.）

		都市家族	農村家族
自己及び兩親の宗教上の意見	同一なるもの	七六、一	九一、三
	異るもの	一七、四	八、一
	無答	六、五	—

家庭祈禱を行ふか	然り	二六、九	三四、七
	否	七一、一	五六、五
	無答	二、〇	八、八
祈禱する家庭に於いて祈禱は規則的に行ふか	規則的	三五、二	八八、八
	不規則	六四、八	一一、二
食事に際し祈禱するや	然り	四二、八	七六、〇
	否	五二、三	一九、五
	無答	四、二	五、五
右の場合規則的に行ふか	規則的	二五、九	八八、五
	不規則	七四、一	一一、五

III 教團の中心

以上に於いて、吾々は教團に於ける信仰及び成員相互の關係に就いて、それが成員の地域的移動によつて如何に變化するかにつき都鄙教團を比較することによつてその主要形相を明にせんと試みたのであるが、最後に僧侶と教團の成員たる檀信徒との關係に就いて述べなければならない。けだし信仰對象と教團成員との間に介在し、彼等に教義を傳へ、彼等を教化指導し、教團統制の中心となるものは僧侶であつて、その成員との關係は教團構成上重要なる位置を占むると考へられるからである。

然らば僧侶は如何なる社會的勢力に基いて教團内部の中心となりその指導的地位を保持し得るのであらうか。僧侶が成員を教化し指導する限りに於いてその社會的勢力は、權威或は威光でなければならぬ。ところでかゝる權威或は威光の成立には第一兩者の間に優劣の差が存在することを前提とし、優位の差がないか又はあつてもそれが小なる場合には、かゝる社會的勢力は成立しない。而して兩者の間の優劣の差が大である場合、優越が劣者に對して促進的に發動する時の社會的勢力をこゝに權威と云ひ、その發動を指導と稱する。かゝる場合、劣者は權力發動の場合と異り、何等自我に對する否定を受けることなく、從つて否定に媒介される自我の對自意識もない。權威の發動に對して服從すれば、自己の判斷と力とによる以上によりよく意欲を充足し、單獨の場合以上に自我が促進され充實され高められるが故に、これに悅服するのである。① 次に優劣の差が極大となるに至れば、劣者は優者に對する自我の主張を失ひ、無條件的に優者に服從する。けだし極大の差異は、優者に對する分析批判評價を不可能にするからである。かゝる無條件的絶對的服從の態度に對しては、優者がその優越を肆意的に發動せしめても、必然服從を見出し、自己を貫き得る可能性が存在する。かくの如き極大の優越に基くところの絶對的勢力をこゝに威光と稱するのである。② 第二はかゝる社會的勤力はその成立の前提として社會的承認を基礎としなければならぬ。卽ち社會的勢力は、その究極に於いては、優位の差に基き、その價値の承認せられるところに發生するのであつて、如何に個人が優越せる能力を有するとも、その屬する集團による價値の承認のない時には、未だ社會的勢力としては現はれない。然るに社會的價値の承認は、それ〴〵の社會や時代の變遷に伴ふて推移する。

たとへば雄辯の價値を認めるアテネに於いては、雄辯家の社會的勢力は、著しく高められてゐたけれども、これと反對に、むしろ寡言を重んずるスパルタに於いては、雄辯は毫も社會的勢力とはなり得なかつた。又社會的迷信の如き、現代に於いては、その價値は根本的に否定されるとは云へ、精神的科學的未發達の時代にありては、その社會的價値位階は比較的高く、從つてそれに關與せる人々には大なる社會的勢力が承認せられたのである。③

かくの如く社會的勢力は、主體間の優劣の差に基き、その價値の承認せられるゝところに成立するのであるが、然らば教團の成員に對する僧侶の威光或は權威は、如何なる優越に基くものであらうか。それが最も純粹なる事實となりて現はれるのは、それが完全なる人格的優越に基づく場合であらう。即ち何人も容易に追求し得ざるところの熱烈なる求道精神や信仰、或は勝れたる教化力及びそれ等を通じて現はるゝ崇高なる人格が、權威或は威光を成立せしめるのであつて、宗祖或は開祖と稱せらるゝが如き高僧に、容易に、この事實を見出し得るであらう。然しながら僧侶の社會的勢力は、かゝる僧侶の人格による優越の外、宗祖或は開祖、宗派及び宗教そのものに基く勢力にも多分に依據する。一般に非凡なる人格は、時間的距離が大となり、現實より遠ざかるに從つて次第に神格化され理想化されるが、過去の偉大なる宗祖開祖の如き非凡なる人格が、絶へず教團成員の腦裡に生動することは、教團の統一的結合を確保すると共に、又かゝる人格並びにその業蹟に對する追憶敬慕の念は、その法の繼承者としての僧侶の勢力を確保し、その優越を持續せしむるところの有力なる因素となり得る。更に新發意と云はれ、善知識或は導師等と尊稱せられて、身分的に優位を認めらるゝことは、宗教そのものに基く勢力に

據るものに外ならない。更に又附隨的には、加持、祈禱、讀經、その他宗教的儀式、僧位等の如きものも、優越の一條件となり得るであらう。色衣の如きものも、一般的には何等實質的價値なしと云へども、地域狹小にして同一教團の重なり合ふところに於いては、優越の强き印象づけに役立つものとみることが出來る。④

ところで鎖鎖性の嚴重なりし封建社會特に農村に於いては、かゝる宗教上の優位のみならず、僧侶は又一般文化に於いても、その優越を保持した。卽ち近世に至るまで、下層民特にその大部分を占むる農民は、自然的人爲的障碍による地域的封鎖に束縛せられて地域的移動の自由少なく、從つて物質のみならず精神財の流通も極めて制限され、かゝる結果は、ひとり寺院の有する文化は、一般社會に對してはるかに大なる差異を以つて勝れてゐたことは爭はれない。從つて寺院は、宗教上のみならず、教育、娛樂その他の中心となり、僧侶は宗教上の導師たると共に、學校教育及び廣く社會教育の指導者であつた。かゝる事情は、僧侶と教團成員との連鎖をより緊密ならしむると同時に、著しく僧侶の權威を增大せしめたものとみることが出來るであらう。更に、僧侶の優越を大ならしめたものに、政治的勢力との結合がある。卽ち寺院をして民衆の監察機關たらしめたところの寺請制度、宗旨人別帳の制度の如きはその一例に外ならない。この制度に於いては、教團成員は婚姻、旅行、移住を初め、奉公人、召抱人等戶籍上一切の異動は、悉くこれを寺院に屆出で、寺院の手形によつて一身の證明を要し、從つてかゝる事情は、更に又離檀の禁止及び一家一寺制と共に、自然僧侶をして、かゝる優越に基いて教團に於いて恣意的支配を行はしめ、その優越が阻害的に發動せらるゝ時は、權威と云ふよりはむしろ多分に權力の形をとると

は云へ、一般に僧侶の社會的勢力を增大せしむるに極めて有力なる因素となつたことは爭はれない。要するに、かくの如く宗教上のみならず、教育、政治その他あらゆる文化に關し、教團成員に對して僧侶の有する優越は、その社會的勢力を著しく大ならしめたと云ひ得るであらう。

次に又、社會的勢力は、その成立の前提として、下位者の承認を不可缺の條件とする。然るに、この點に就いてみる時、かゝる農村社會は又好個の溫床でなければならない。卽ちその嚴重なる封鎖性の故に、こゝに於いて、すべて個人の生活はその行爲の樣式に於いてのみならず又その對象に於いても類似するが故に、個人と團體にとつて價値であるところのものは、同一の價値種類に屬し、相互に深く依存する。而してこの社會に於ける信仰の不變性と强靱性に基き、僧侶の社會的地位は、極めて高く評價されるのみならず、傳來的慣習が支配する領域は頗る廣く而も各領域の細部にまでその支配を及ぼすが故に、價値位階は定立し、社會的勢力は自ら傳承性を帶びると共に、永く保持せられて容易に衰退しない。

然るに、交通通信機關の發達による地域的封鎖性の崩潰は、精神財の交流、教育の發達普及に伴ふて漸次一般社會の文化を發達上昇せしめ、從つて從來に於ける寺院及び僧侶の有する百科全書的な機能は、社會のそれに對する要求の喪失せらるゝにつれて、次第に分化離脫する。然しながら、現代農村に於いては、猶地域的封鎖性に多分に制約せられて、その文化は一般に都市のそれよりも低く、從つて僧侶の教團成員に對する優越は、單に宗教上のみならず、依然として、文化の上に於いても優位を保持することが可能なるのみならず、猶傳統及び慣習

の優位的に支配する社會なるが故に、僧侶に對する社會的地位の承認も高く且固定して推移し難い。而してこゝに於ける教團は、すべて永住するところの同質的なる檀徒のみによつて構成せられ、從つて相互の熟知親近の關係は、教團成員間に於いてのみならず、僧侶と成員との間にも成立し特に世襲寺院に於いては、相互は各世代を通じて熟知了解するが故に、右の如き僧侶と成員との上下の隔たりは、相互の分離或は對立の隔絶を產むことなく、上下の區別を强調する權力關係の替りに相互が指導と悅服歸依とによつて親和結合し、教團はそれによつて統一性乃至齊一性が與へらるゝ可能性が充分存する。

然らば右の如き僧侶と教團成員と關係は、都市に於いては如何に規定せられてゐるであらうか。近代都市は文化の高度に發達せる社會であり、又分化の進みし社會である。從つてこゝに於いては、教團成員の有する文化の程度は、一般に農村に比して著しく上昇するが故に、僧侶の百科全書的機能は全く消失し、農村に於けるが如き宗教以外の文化に於ける成員との差異は、一般に極めて縮少せらるゝのみならず、教團成員の垂直的移動に伴ふ絶えざる社會地位の變動は、教育政治その他に於いて、僧侶に對し社會的に優位を占むるものも現はれて來る。のみならず、一方又、成員の地域的移動性によつて、古來の成員は次第に失はれ、それに對する新來の成員の割合が大となるが故に、一般に教團成員の共屬意識は稀薄となり、又教團の傳統と慣習も甚だしく攪亂され、而してこのことは、一般に農村に於けるが如く信仰の强固ならざることゝ合して、寺院の經濟的維持に際して、僧侶に對する成員の經濟的勢力を大ならしめて來る。而してかゝる上下の近接或は顚倒は、從來の如き僧侶に對する

成員の無條件的歸服に對し、比較批判或は自我主張の餘地を與へ、從つて僧侶は、成員の信仰生活を促進し、その調和統一の中心となり、教化指導の效果を充分擧げ得ざる限りは、その權威は保持され難くなる。然るにこゝに於いては、成員の地域的移動性の故に、成員相互間の熟知のみならず、僧侶と成員との熟知關係も亦極めて限定されて居り、兩者は主として宗教的儀禮の執行を通じてのみ結ばるゝが故に、相互の全人格的交渉を通じて教化指導の行はるゝ機會は少く、農村教團に比し、その效果を擧げ得ることは困難なる狀態におかれざるを得ない。次に又、都市は成員の異質化と共に分化の進んだ社會であり、從つて個人と團體にとつて價値あるところのものは、必ずしも同一種類に屬しない。かくて價値の分化と自律化に伴ひ、教團内には夫々の價値位階が所有される傾向が示されて來るのみならず、常に社會現實態を分析批判し、それに對して實質的價値を追求せんとする成員の合理的なる態度は、こゝに於ける價値位階の定立することを許さない。かくて宗教或は宗教制度と共に僧侶も亦常に他との比較に於いて批判分析の對象となり、而も農村教團に於けるが如き傳統や慣習の擁護を缺くが故に、僧侶の權威の定立は、農村教團に比して、甚だしく困難となつて來ることは爭はれない。

要するに、都鄙教團を問はず、僧侶の權威の中樞をなすものはその人格であり、教團成員はその人格に悅服歸依することによつて、自己の信仰を深め、自己を高め、同時に、教團はそれによつて統一性が與へらるゝのであつて、僧侶は常に人格陶冶の必要あることは云ふまでもないが、農村教團が權威構成或は持續の溫床なるに反し、都市教團に於いてはかゝる溫床を缺き、只崇高なる人格的優越のみがその權威に價するが故に、僧侶は絶えず自

己の修養研磨によつて實力を補給せざれば權威の衰退は否まれないであらう。

① 臼井二尚氏『社會的勢力としての權威の位置』年報社會學第六輯、一二八―一二九頁。

② 同氏、同論文、一三〇頁。

③ 小山隆氏『社會的勢力持續の諸條件』、社會學雜誌、第七七號、一五頁及び一七頁。

④ かゝる點に關しては、レオポルドの興味ある敍述あるも、今はそれにふれる遑はない、（L. Leopolp; Prestige Book III, chap. III.）

（四）結

以上に於いて吾々は都鄙教團に於ける成員の地域的移動性を考察し、而してかゝる移動性に基いて都鄙教團の形態が如何に變動するかを、夫々の特相を抽出比較することによつて大體明かにせんとしたのであるが、教團の問題を考察するに際しては、更に他の角度よりの考察も必要であらう。特に經濟との關聯に於いて教團を把捉解明することは重要な課題であらうと考へられる。只吾々はこゝでは、精神共同社會としての教團が次第に崩壞の過程を辿る基礎的因素を、地域的封鎖性の弛緩乃至開放による教團成員の移動性に求めて、教團を考察したに過ぎない。

然らば精神共同社會としての性格を次第に喪失しつゝある教團が、今後如何なる形態に於いて、そのあるべき

本來の姿に止揚還歸せしめられるであらうか。宗教特に宗教制度の問題が峻烈なる批判檢討を受けつゝある現今、この問題の解明は極めて重要であり又その對策は緊急事であらう。この小論がかゝる問題對策の理論的礎石の一つともならば、幸これに過ぎるものはない。（昭和十六、九）

	昭和十年度ニ於ケル檀家總數	昭和十六年度ニ於ケル檀家總數	五ケ年間ニ於ケル移動檀家數	同年間移動ニヨル喪失檀家數	同年間ニ於ケル喪失檀家數	增減
敦賀市外二九ケ寺の場合	一〇六二戸	一一〇三戸	二九戸	一〇戸	二二戸	四一戸增
敦賀市外四一ケ寺の場合	一二六七戸	一二二九戸	四〇戸	三八戸		三八戸減